

□講演□

心やわらかに今を生きる

善光寺住職 黒田 武志

私は今年で満六十歳になりました。人生の一つの節目となる年に、そして九十六年の歴史と伝統を持つ大田原高校が新制高校となって五十年を迎えるという記念すべき年に、母校でみなさんと会い、お話をさせていただく機会がいただけたことを、たいへん嬉しく思っています。

私の人生は今、三分の二を終わろうとし、大田原高校を卒業してからは四十二年が過ぎようとしています。何十年ぶりかで母校の前に立ち、

自分がこの地で青春を送った日々のことを、昨日のこのように思い出しました。私が入学したのは、敗戦した日本が驚異的な立ち上がりを見せようと努力していた昭和二十九年。物質的に裕福な時代に生まれ育ったみなさんには想像がつかないかもしれないが、螢光灯のスタンドが開発され、入学祝いとしてもらったり、LP版のレコードがやっと出始めた、そんな時代でした。町の中には、石炭を燃料とする機関車が、

ポップーツというかわいい汽笛をあげて走っていた…。

四十数年前、堀内肖吉同窓会会長ご指導による剣道部が優勝し日本一となり提灯行列が行われた。新しい校舎の前に立ち、そんな四十数年前のできごとを思い出し感無量になりました。学問だけではなく、体の鍛練の方でもトップクラスという伝統が今も続いていることに喜びでいっぱいのお気持ちになります。

うわべを飾るのではなく、中身を磨いて生きる、「質素堅実」という校訓は、私たちの一万七千人の先輩の時代から脈々と受け継がれてきたすばらしい精神です。学問を深めながら心身をよく鍛練し、真に内面のしっかりした人格形成を目指しているこの高校に学んでいるということは、誇るべきことだと思います。

きつとみなさんも、四十年後、五十年後、人生の三分の二ほどを終えた年齢となり、高校時

代を思い出す日がくることでしょう。もしかしたら、母校で講演する人もいるでしょう。自分の歩んできた道を振り返り、無限の可能性を持つ若い人たちに、何を言えるか。自分はこんなふう生きてきたと、胸をはっていえるよう、一日一日を大切に生きていってほしい。

私の場合は、あつという間に月日が過ぎて、振り返れば、「俺は何もしてこなかったなあ」というのが本当の感想です。「黒田、おまえは六十年何やってきたんだ？」と誰かに聞かれたら、「別に何もしてないよ」と飄々として答えると思います。ただ、私は僧侶ですから、周りの方をみな師として、何千年も伝わるすばらしい仏の話を聞かせてもらえ学ばせていただけの機会があり、私もまた、その話をお伝えすることができるだけです。みなさん、一人ひとり、その話の中から何かを感じてくださればよい…。僧侶になつたばかりの若い頃は辛い体験も



ありました。しかし、今思えば、過去のすべての苦しみや辛さは、自分を磨く貴重な体験であり、未来に大きくジャンプするためのバネとなつたことをしみじみ実感しています。かれこれ三十年前に私は、「人間は死なない。何か大きな力に生かされている」ということに、さまざまな体験を経て気がつきました。私が、大田原高校の校訓「質素堅実」を改めて胸に刻みこんだのは、それから本気で仏の道を学びはじめた三十年間だったように思います。

みな等しく苦しく、みな等しく尊い

さて、みなさんは、仏教の教えというの、どういうものかご存じでしょうか。仏教というのは、仏陀（目覚めた人・釈迦の尊称）が説いた教えのことで、今から二五〇〇年前にインドに起こり、ほぼアジア全域に広がりました。

お釈迦さまは、本名をゴータマ・シッダルダ

といいカピラ王国の王様の子、つまり王子として何不自由のない裕福な環境でお生まれになりました。しかし、幼い頃から、大きな樹の陰でもの思いにふけてじつとしていたような、考え深い子どもだったそうです。郊外に出て農耕する人びとをみれば、「牛や馬はなぜムチ打たれ働かなければならないか、人はなぜ泥まみれになつて働かねばならないか」また、自然の中にいれば、「蛙が虫を、蛇が蛙を、雉が蛇を、獵師が雉を……」というように、この世の中はなぜ何かを殺さなければ生きていけないのだろうか」など、深く深く考えておられました。青年になるとますます、考えに沈まれる日が多くなりました。

父親の王様は心配して、気晴らしに外出するよう言いました。お城には東西南北に門がありました。従者に言つて、東の門から馬車に乗って出かけられるようにしました。するとそこ

には、顔は皺だらけ、頭は真つ白の腰の曲がったみすばらしい人間がいたのです。

「あれは何者か？」とおたずねになると、

「あれは、老人です。人は誰でもあのよう
老いていくのです」

と教えられ、お釈迦さまはよけいに物思いに沈まりました。

日を改めて南の門から出ると、そこには、青白い顔をしてやせ衰えた人が倒れています。

「あれは病人。肉体を持つている以上、誰しも病気になることを免れることはできません」
とのこと。西の門から出ると、大勢の人が泣きながら白い布に包んだものを担いでいくのが見えました。

「あれは、死人。人は誰でも一度は死なねばならないのです」

すっかりふさぎ込むお釈迦さまが最後に北の門から出たとき、そこにいたのは、大きな樹の

陰に静かに座っている人でした。やせており、身なりも粗末でしたが、たいへん平和的で気高く清らかな顔をした人でした。

「あれは修行者です。いつさいの欲望を捨て、ひたすら真理を求めておられるのです」

お釈迦さまはこの言葉を聞き、「これこそ私が進む道だ」と、出家をする決心をしたのです。

生・老・病・死―人間には逃れられない四つの苦しみがあります。これを「四苦」といい、その他にも、親子・好きな人とも別れなければならぬ「愛別離苦」、嫌な人・嫌いな人といっしょに暮らさなければいけない「怨憎会苦」、財産・地位・名誉・知識・技能など欲しいものがあるように手に入らないという「求不得苦」、生まれて体を持つているから食べたり着たり、家庭を持つたりしなければならぬという「五蘊盛苦」といった四つの苦しみがあり、それらを総合して、『四苦八苦』と数える人生の苦しみを

とされるのです。いったいこの苦しみからどうしたら逃れられると思いますか。

仏教は、これらの苦しみ・迷いからすべての生きとし生けるものを救おうとする教えなのです。お釈迦さまはこの答えを求め、そして悟り、八十二歳で入滅されるまで歩いて歩いて歩き抜いて仏の道を説いて回られました。

有名なお話の一つに、『四河に入って元の名なし』というものがあります。お悟りになったお釈迦さまが生まれ故郷に戻ってまいりました。

感動的なすばらしいお話に貴族の青年たち、また、お釈迦さまの実際の弟子までみな弟子になりたいと、床屋さんで頭を剃りました。そして、その床屋さんも「私も弟子となつてついていきたい」と頭を剃りました。さあ、入門の式である得度式では、兄弟子の足を三度礼拝する儀式があります。貴族の青年たちは、これまでの奢り高ぶった心を捨てて無一文で托鉢する生活に

入るのだから、謙虚な気持ちになるためにこれまで自分の低かった床屋さんを自分たちの先頭に立たせることにしました。床屋さんの次が弟子王子という順番です。しかし、弟子王子はどうしても床屋さんの汚い足を拝むことができません。ついさっきまで自分は王子の身分、相手はかけ離れた身分だったので。どうしても頭が下げられず心で苦しんでいる弟子王子にお釈迦さまは言いました。

「インドを流れる大きな四つの河は陸地を流れるうちは別々の名がついているが、海に流れこんでしまえばみな同じ海の水となるのだよ」これは、人間は平等に尊厳であることを示されたものです。貧富・学習能力・運動能力・体格…みなさんは人とのさまざまな違いによって、優越感を持つたり劣等感を持つたりしたことがあるかもしれません。しかし、人間はそれぞれ、みんな違って、そしてみんな尊いものな

のです。みんな同じ尊さを持つ海の水なのです。

苦しみなしでは歓喜なし

お釈迦さまの教えを伝え受けられた高僧に、
達磨大師だるまたいしという方がおられます。中国禅宗の初
代の祖師で、今から一五〇〇年ほど前にインド
から中国の梁という国に渡ってこられました。
梁という国には、武帝という、たいへん熱心な
仏教信者である王様がおりました。インドから
名高い高僧・達磨大師が来たということできつ
そく城に招きもてなそうとしました。

「インドからこられた高僧方は、みなすばら
しい経典を持ってきてくださいますが、あなた
さまはどのようなものを持ってきてくださった
のですか」

と武帝が聞くと、

「私はお経みたいなものは一冊も持ってきて
いません」

とそつけない返事。びっくりして武帝は、

「私は大きな寺もたくさん建て、坊さん方に
も供養し、困った人民を助け、お仏像も造らせ、
自らも修行にはげみ、世間では私のことを「仏
心天子」などと言っているそうです。どんな功
徳とくがあるでしょうか」

と問うと、

「どれもこれも功德にはならない。無功德だ」
という手厳しい答えでした。

どんなよいことをしても、それを鼻にかけた
り、自慢したり、報酬代償を求めようとするよ
うでは、高慢になるだけで功德にはならない。
人民が私のことを尊敬するだろうというもの
は、自分の感情や欲望に縛られるものであり、
そんなものは功德とは言わない、と、達磨大師
はおっしゃりたかったのです。

「ではどうしたらいいんです。仏法の究極に
ありがたく尊いことは何なんですか？」

「廓然無聖かくねんむしよ（カラリと晴れた青空のように、何も無い。ありがたいものなど仏法には何も無いのだ）」

武帝は驚き、

「では高僧であるあなたは、尊い聖者ではないのですか」

「さあ、知らんねえ」

と達磨大師。

ここで武帝の機嫌をとっておけば、ぜいたくな生活ができただろうに、達磨大師は迷える人々を救う誓願一筋に生き、小さな蘆の葉の船で揚子江を渡られたと伝えられています。

人は、高慢な心になりやすい生き物です。最初は無償の愛で施していても、人からほめられたりおだてられると、澄みきった心にごりが見えてきます。

日本にも、光明皇后という、貧しい人々のために献身的に尽くした方がいました。聖武天皇

のお妃だったその方は、聡明で容姿端麗、その上仏教に帰依して貧しい人の医療所や孤児院を建てたりして尊敬を集めた方でした。しかし、あまりみなに褒め讃えられ、光明皇后の心にほんの少し、傲慢な気持ちが生まれそうになりました。そんなとき、天からの声が出て、

「あなたはこれから千人の貧しい人びとを風呂に入れ、体の垢も心の垢も落とし清めていきなさい」

とお告げがありました。光明皇后はその通り、貧しく汚れ切った人々の体を愛情こめて洗いぬいで洗っていききました。そして、九百九十九人洗い終え、最後の一人となったとき……。そこにあらわれたのは、全身膿うみだらけの老人でした。

皇后は一瞬ひるみました。洗っても洗っても膿は落ちない。しかしそのうち仏のような気持ちになり自然に、自分の口で、一カ所ずつ膿を吸い出していったのです。最後の膿まで吸いおわ

ったとき、その老人の姿は阿闍^{あじやく}仏という仏さまの化身に変わりました。光明皇后の傲慢になり、そんな心を試そうとしたのです。光明皇后は、多くの苦しみのもと、真の歓喜を味わうことができませんでした。

本当の歓びは、苦しみのあとでやってきます。今、みなさんが苦しいと感じているのなら、それは試されているのかもしれない。より、尊くすばらしい人間となるために。

先にも言いましたように、世の中にはいろいろな苦しみがあります。精神的苦痛、肉体的苦痛。たとえば、大田原高校では、二十六時間かけて那須野が原八十五キロを歩くという伝統行事がありますね。「質素堅実」という校訓をはつきりしたかたちで具現化した行事で、強歩を通じて規律ある態度と相互協力の精神を培い、校訓に相応しい不撓不屈の精神と強健な体力を養うのを目的としているそうです。これは私たち

の想像を絶する精神的肉体的苦痛をとまなう、すさまじい鍛練法・苦行だと思います。私は、小学生が大高生にあてて書いた手紙を読み、涙が止まらなくなりました。

『大高生のおにいさんたちが、今年も八十五キロ強歩をやると聞きました。去年は、真っ暗い中、夜も寝ないで歩き、ねむくてねむくて道路に座りこんだ人もいたとききました。足にマメがいつぱいできて、足を引きずるようにして歩いたというお話を聞いて、胸がいつぱいになりました。つかれても、ねむくても、足がいたくてもがんばり続けたおにいさんたちは、すぐくえらいなあと思いました。今年はずいぶん応援に行きたいと思います。大高生のおにいさんが最後まで歩き続けて、全員がぶじに大高にとうちやくするように戸田小学校のみんなまで応援しています。がんばってください』

ああしなさい、こうしなさいと口で説明する

よりも、汗しているその後ろ姿が一番心を揺さぶる。感動させるんですね。強烈な苦痛に耐え、完歩したあとの達成感、満足感、充実感、そして自信。そうした歓喜をかみしめられる瞬間と、いうのは、最高のものです。人生は苦しい。でも必ず、歓喜の瞬間がおとずれるということ、みなさんは高校時代に体験的に得られているんですね。本当に、すばらしい、世界一の宝です。

心明るく 心清く

八十五キロ強歩というのは、まさに、人間の本質的な修行の一つであると私は思います。戦後は、人間の本質的な修行をしていない秀才と、いうのが世の中にはたくさん出ていき、指導者となつて近代の組織を動かしてきました。日本は、知識的・技能的にたいへんな伸び方をし、優れた人材が数多く生まれました。政府は学校制度をつくり、小学校から大学まで知識・技能

を中心とした教育を行ってきました。

その結果、人間にとつて最も大切な「心」の教育がおろそかになったように私には思われます。みなさんはいずれ、「父親」になるだろうし、教師の道を選び歩んでいく人もいるかもしれぬ。人間としての「心」「特性」「習性」を次代に伝えてくれたらと願わずにはいられません。

心の中でも、「親孝行の心」ほど美しいものはないと私は思います。みなさんは、今、胸をはつて孝行していると言えますか。今は言えなくてもいい。でも、いつかは気づいてほしいのです。

野口英世博士という人とお母さんの話をしましょう。

ご存じの通り、野口博士は黄熱病という恐ろしい風土病研究のためアフリカへ渡られ、苦しむ人を救っているうちに自分が感染し亡くなられたという日本の誇る世界的なドクターです。

福島県磐梯山のふもとの農村で生まれ、幼いときに囲炉裏に転がり落ちて手に大やけどをし、右手の指がかたまつてしまいました。『てんぼう』と蔑まれるのを、お母さんは血を吐くような苦勞をして医者にかけ、使える手にしてもらいました。その頃から野口博士は、自分も気の毒な人を救いたいと医学の道を選ばれたのです。

世界的に有名になつた野口博士がアフリカからいったん帰国したとき、全国から講演依頼が殺到しました。野口博士はそのとき、「少しでも母のそばにいたいので、ともに連れていけるのなら」

という条件で講演を引受たのです。東京、大阪、名古屋、京都：どこへ行くにも、福島から連れてきたお百姓さんであるお母さんといっしょ。講演会あと紳士がずらりとならぶ晩餐会でもお母さんを横にすえて、ていねいに洋食の説

明をし、自分のナイフとフォークで小さく切つて食べさせたとか。また、お母さんの手を引いて、大阪の箕面へ紅葉狩りにいったときは、休憩した茶店でも「おつ母さん、おつ母さん」と子どもが甘えるように慕つていろいろと世話をしたそうです。その様子を見ていた茶店の女将は涙を流し、後年へそくり何十万円をはたいて、箕面公園に野口英世博士の銅像を建てられました。

偉大になつても変わらず母を尊ぶ野口英世博士の心というものは、質素堅実そのものであると私は思います。

こんな親孝行な話とは逆に、日本には身を引き裂かれるような悲しい話も残っています。姥捨て山という実際にあつた話です。

日本：とくに東北地方は昔はたいへん貧しく、食いぶちを減らすため間引きも行われたし、老いて役に立たなくなつた自分の両親を一度と

戻れない山奥へおぶつて捨てにいったのです。

ある男も、泣き泣き母親を背負つて山へ入つていきました。途中途中で母親がポキンポキンと小枝を折っている音がする。この枝を目印にうちにもどつてくるつもりだろうかと男が思つて、母親をトンツと降ろしたとき、母親は男に言いました。

「今までどうもありがとう。おまえ気をつけて帰りなさいよ。迷わないように小枝を落としたりしたから、それを見ながら帰りなさい」。

親というものは、こういうものなのです。

みなさんに、親孝行していただきたいと願う理由がわかつていただけたと思います。

さて、大田原高校の学習の指針は一つ一つがまさに仏の教えに通ずるすばらしいものです。

一、夢なきところに努力なし

一、目標なきところに到達なし

一、計画なきところに実行なし

一、練成なきところに熟成なし

一、反省なきところに進歩なし

一、苦悩なきところに歓喜なし

この指針は、学習ばかりでなく、運動部、文化部、そして大きくみれば人生指針と言つてもさしつかえなく、この六つの指針を胸に刻みこんで生きる大高生のみなさんは、卒業してもどんな困難をも乗り越えていけると思います。

では私の方からは、このような言葉をみなさんに送りたい。

「心明るく、心清く。そして心やわらかに」。

学習も大切。運動も大切。しかし、まずは心を明るく清らかにすること。そして、「ねばならない」という気構えを捨てて、ありのままを柔らかに包み込み受け止める心を持つこと。布施をすればするほど富が得られるように、心さえ明るく清らかであれば、学習能力も運動能力も、自分が必要だと思つたものは自然に備わつてき

ます。

仏の教えの中には、八正道―正見（ものごとを正しく見る）・正思惟（正しい考え）・正語（正しい言葉）・正業（正しい行為）・正命（規律ある生活）・正精進（正しい努力）・正念（正しい自覚）・正定（静かな心）というものがあります。また、六波羅蜜―布施（思いやり）・持戒（まじめ、しつかり）・忍辱（質素・我慢強い）・精進（勤勞意欲）・禪定（落ちつき、物静か）・智慧（向学心・向上心）というものもあります。これらを常に頭の中において歩んでいくことが、心明るく清らかな人となる一つの方法だと思えます。

日常はもつと簡単な言葉で、

- 一、すみませんという反省の心
- 一、はいという素直な心
- 一、おかげさまという謙虚の心
- 一、私がつますという奉仕の心

一、ありがとうという感謝の心

と唱えてみるのもいいでしょう。できるだけ、声を出して。幼稚園時代に戻ったように、恥ずかしがらず大きな声で。

さて、いろいろと私なりの話をしてまいりました。最後に、本当に心から、このようにみなさんと会える機会がいただけただけことに、三顧の礼をもって感謝いたします。一期一会―私はずべての出会いを、一生にただ一度だけかもしれないこの上なく大切なチャンスだといつも思っております。このすばらしい出会いを私の宝として生きていきたいと思っております。

（第96回栃木県立大田原高等学校創立記念講演より抄録）